

松戸市子どもの未来応援会議での主な意見等一覧

資料2

1 主な意見

(1) 子どもの未来を松戸市全体で応援について

委員からの意見	子どもたちが、こぼれにくい地域づくりが必要。次に、それでも、どうしてもこぼれてしまう子どもはいるので、その子どもを発見することにつながる必要がある。
	こぼれにくい地域づくりとして、声かけなど、いろんな人が接点を持てるようなことが必要。
	こぼれにくい地域づくりとして、すべての人が担い手になれるのだということを示してほしい。
	住民と行政の協働による支援も必要、そのためには住民の解決力の向上も必要。
	家庭で支えられないところは地域や松戸市全体で支える。役所が支援することと、住民の方が支援できることについて、大きな方向性を示しながら事業を整理する。
	住民に新たな力を発揮してもらうためには、活動していけるような事例の一覧が必要。
	高齢者と子どもが関わることで、高齢者にとっては介護予防になる。子どもは、高齢者からいろいろな経験を伝えられて、健やかに成長していける。多世代交流拠点づくりという視点が必要。
	経済的困窮者は経済的に自立していないかもしれないが、それ以外の面では自立した1人の個人なので、応援する側に回る仕組みや視点が大事である。

(2) 子どもの居場所について

委員からの意見	すべての子どもが松戸市の中でなんらかの居場所を見出せることが必要である。家庭が居場所になる人はそれで良い、そうならない人については、松戸市として作っていく必要がある。居場所には、学習、食事、寝場所という基礎的なインフラ、それに体験が重要。また、きちんと向き合ってくれる大人という時間が持てる、適切にトラブル対応するといった4つが必要。
---------	---

(3) 人材育成について

委員からの意見	松戸市は児童館が1カ所しかなく、子どもの居場所としても数カ所しかない。小学生から高校生あるいは20歳ぐらいまでの青少年や保護者に実際に対応する職員の人材育成を行ってほしい。
---------	--

(4) 相談業務(窓口)について

委員からの意見	ひとり親の悩みの相談相手が、多い順に友人・知人、家族・親戚、相談相手はいない、となっており相談機関につながっていない可能性が高いと思われるので非常に気になる。
	困りごとがあって相談に来てくれる人は良いが、来てくれない人のサインに気づくには、関わる人を増やす必要がある。
	福祉部門の施策の多くが、すでに既存の国の枠組みの中で進めていると思うが、現実には、漏れてしまっている子どもや受給要件に合わない子どもたちがいる。また、子どもの貧困率は国の推計では13.9パーセントなので、その中にはいろんな子ども達がいるし、高校生がおちてしまうこともある。
	相談窓口についてまだ足りないのではないか、例えば、子育て世代包括支援センターなど3カ所あるが、もっと増やしてもよいのではという気がする。
	多子世帯の家庭の困りごとなどに対応できるよう守備範囲を就学前から就学後までに広げた相談窓口が必要。

(5) 外国人への支援について

委員からの意見	これから多くの外国の方が日本に住む時代になってくるので、日本人だけではなくて、いろんな人たちが分かち合う、共有しようという社会が子どもの未来にとって非常に重要ではないか。今後、外国人への支援が必要である。
---------	--

(6) 離婚後の経済的支援について

委員からの意見	離婚後に貧困という状態に陥るのを極力なくしたい。一度貧困に陥ると、なかなか抜け出せず、もう1回出直すには大変なエネルギーが必要になるので、離婚した時に集中的に支援する必要がある。
---------	---

(7) 健診等について

委員からの意見	予防接種を受けていないお子さんは問題を抱えている家庭が多いと感じる。予防接種を受けていないお母さんたちは、働いていて非常に忙しいなど様々な原因があるのではないかと感じる。予防接種を受けていないお子さんのお母さんたちは、実際いろんな面で生活的に困窮していると現場からはみえている。なので、健診については、時間をずらして設定し、周知方法としては、電話ではなくメールを使うとか、今までと違ったやり方で情報を発信することも必要である。
	母子手帳をもらおうと妊婦健診の無料化などがあるが、1回目は初診料を払い病院へ行って妊娠の診断が出ないと母子手帳が貰えないとなると、2万円くらいの経費が発生するので母子手帳をもらいに行けないことがある。

(8) 学校での子どもの貧困対策について

委員からの意見	非常に多くの事業が列挙されているが、教育サイドが薄いという印象がある。学校の中での取組みで学びという点が大変重要なので、福祉的サイドでやる学習支援だけではなく、学校の中でどういう取組みをやるのか、もっと学校でどう取り組んでいくか、拡充させていく必要がある。
---------	--

(9) スクールソーシャルワーカーの取組みについて

委員からの意見	不登校、中退等、スクールソーシャルワーカーの配置によって対応できることがある。学校がプラットフォームになって、さまざまな子どもたちへの支援が展開されることが重要である。
	スクールソーシャルワーカーの配置は効果があるのなら拡充すればいい。ある程度、数値化したものがあったらいい。
	発見するという意味では学校は大きな場であるが、先生がすべてフォローするのは大変厳しい。中学校に限らず、可能であれば小学校も含めて、スクールソーシャルワーカーと学校の先生がタッグを組んで進めると良い。また、高校生以上をどうみるかという視点も大事だと感じた。発見する場としての学校というものを留意していきたい。

(10) 就学援助費の手続きについて

委員からの意見	就学援助費は、もう少し配慮が必要だと感じる。例えば、申請する子どもも申請しない子どもも、両方とも先生に提出するようにし、それを封筒に入れ外から見えないように回収すれば、誰が申請しているかわからないはずである。また申請もれをなくすことにつながる。
---------	--

(11) 市からの案内文について

委員からの意見	「ひとり親家庭のしおり」については、児童扶養手当の説明は、もう少し親切な表現があるかと思う。当事者目線がすべての表現に足りない。就学援助も含め、すべての広報を当事者が見たらどう思うかという視点が必要。
---------	--

(12) 子どもの未来応援事業に関する表現方法について

委員からの意見	松戸市子どもの未来応援事業一覧の中で、「経済的に困窮していると福祉サービスを提供します」というような書き方になっている。経済的に困窮というと、人それぞれイメージが違うと思うが、困窮していると言われることが市民にとってどんな感覚を持つのかということを考えると、「困りごとを抱えている」とかの表現の方が良い。
---------	--

2 これまでの議論を踏まえた論点

(1)子どもの未来は、行政だけではなく、様々な担い手によって支援していくような地域づくりが必要である。

①子どもの未来づくりの前段階として「子どもたちが、こぼれにくい地域づくり」が必要。官民協働を促進し、住民による発見力を高め、そして住民による解決力もつけていくといった視点が必要である。

②子どもたちが、こぼれにくい地域づくりのためには、気づききっかけや、いかに気づけるようにするのが重要である。また、住民間の接点を多くするため「安心して声をかけあえる」地域にする必要がある。

③地域の担い手としては、これまでも活動されている民生委員・主任児童委員、地区社会福祉協議会、町会・自治会や社会福祉法人やNPO法人、市民活動団体などがあり、新たな担い手も含めて、地域全体で子どもの未来を応援するといった視点が必要である。

(2)すべての子どもに、何かしらの居場所が必要である。

①学校や家庭以外に自由な時間と場所を提供することにより、孤立を防止し、子ども一人一人のニーズや課題を把握し支援につなげる必要がある。

②子どもの居場所は、体験・交流の場の提供、他者との関わりをもてる時間、トラブル対応(生活支援)、栄養や知識の提供の4つを提供することが必要である。

③居場所のスタッフや子どもの支援者には、子どもたちが信頼できる大人としての資質や能力が求められており、人材育成を積極的に進めていくことが必要である。

(3)子どもの支援には、様々な制度があるが、制度があってもたどり着けない、あるいは利用しにくいといった状況があり、必要な時に必要な支援につながる必要がある。

①相談窓口のワンストップ化の推進など、支援につながる仕組みを検討していく必要がある。

②行政で作成している支援策の案内文などは、もっと当事者目線が必要である。また、支援策等の情報の発信方法も検討していく必要がある。

(4)学校現場での子どもの支援については、スクールソーシャルワーカーの役割は大きい。